

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 14 日

所 属： 獣医学部 獣医学科

氏 名： 職位： 講師

役 職： 井上 真紀

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

2年次の獣医療倫理・動物福祉および5年次の医療面接実習では獣医師として他の人とのかわり方、動物との向き合い方において独りよがりにならないように、共感の姿勢を身につけてもらう努力をしている。

動物応用科学科の科目：動物解剖生理学実習で、人体を用いた実験で体の反応、生理的バリエーションを理解し、動物にかかわる学科で学ぶものとして基本的な体の仕組みを知ってもらうようにしていた。

2021年度まで担当していた獣医生理学実習 II では獣医師として理解しておかなければならない体の仕組みについて、人体や動物を使った実験結果を考察することでその理解を確実なものにさせるとともに基本的な仕組みだけでなく、生理的な範囲で生体の反応はバリエーションがあることを理解させるようにしていた。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医療倫理・動物福祉(分担)	獣医学科	必修	2	140
総合臨床実習（医療面接実習）	獣医学科	必修	5	140
動物解剖生理学実習（分担）	動物応用学科	必修	2	140

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

獣医療倫理・動物福祉および総合臨床実習の医療面接実習では、獣医師としての基本姿勢、動物に対する福祉的態度を理解してもらい、これからの獣医師としての倫理的福祉的態度を身に付けてもらう。

動物応用科学科では動物にかかわる学習をするにあたり、体の基本の仕組みを知るとともに、自らの体で調べることで楽しみながら学習できるようにしていた。

2021年度まで担当していた獣医生理学実習 II では、下級の学年では学生はただ暗記することが主体の学習になっているため、それを変えて自分で考え、理解できる学習にさせていた。教科書を見て教科書的な標準的な機序しか暗記しないというのではなく、生体の反

応にはバリエーションがあり、そのバリエーションも実験誤差などではなく、すべて身体の調節のための根拠のある反応であることを考えられる学生にするよう努力していた。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

獣医療倫理・動物福祉の授業では、獣医師としての基本理念を講義するなかに、実際に事例を多く紹介して、獣医師としてよくない対応、良い対応や動物に対してのよい姿勢を理解しやすいようにしている。こうした低学年での講義を踏まえて、5年次での医療面接実習では模擬クライアントさん相手に獣医師として適切で共感的な対応ができるように実践してもらっている。

動物応用科学科での動物解剖生理学実習での生理学実験では、人体を用いた実験で実際の体の反応、機能を体感してもらうことで体の仕組みに興味を持ってもらい、生体の反応にバリエーションがあること、それが説明可能なことを示す。実験後に考察説明をすることで、独りよがりやで間違った考察にならないようにしている。

2021年度まで担当していた獣医生理学実習 II では、実習での実験データは失敗したらやり直しをすることで、最終的に失敗のないデータを得させて、それを考察させる。失敗データの場合、自分のデータでは考察できないので、教科書を見て教科書的な標準的な機序しか考察として書けないが、生体の反応にはバリエーションがあり、そのバリエーションも実験誤差などではなく、すべて根拠のある反応をしているので、生理学的に説明ができるものであることからそうしたバリエーションのあるデータをそれぞれに持ち帰らせて、それをきちんと考察させる。そのレポートを提出させた後に考察の説明を行い、自らの考察が的を射たものであったのか、見間違いだったのか考えてもらうことで理解を深めてもらうようにしていた。

また、獣医師としてはチームで働くことを身に着けておく必要があるので、各実習項目で班員が協力してデータを取得するように促している。項目ごとに別の担当者を班で決めて、担当者がその項目のリーダーとなって班員全員で実験に取り組むやり方と入れている。これにより積極的な誰か一人が実験をして他は見ているという状況にならないようにしていた。

アクティブラーニングについての取組

実習科目は班で相談しながら実験をするのでグループワークになっていた。

獣医療倫理については毎回その講義にかかわる内容の自分の意見を書く課題を出しているので、受け身で講義を受けただけではない、自分の意見を表明する機会にもなっている。

ICTの教育への活用

講義や実習時の実習の予習・方法・考察説明はパワーポイントを用いている。講義内容、

実習では実験方法や実際の実験の動画も提示して説明している。講義時には学理の小テストを使って都度、学生の理解度を測っている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の日安：15～24行（600字～960字））

① 教育（授業、実習）の創意工夫（A）

獣医療倫理・動物福祉では授業ごとに課題を出し、その日の授業にかかわる課題を考えさせることで理解を深めさせ、また授業の感想を書いてもらうことで振り返りをしてもらっている。

医療面接実習では、一般の飼い主さんたちに協力していただき、学生が獣医師として、模擬クライアント役と面接するのを見ていただき、一般飼い主の視点からのコメントを言うってもらうことで、大学内のものではわかりにくい視点を学生共有してもらい、面接の技術、態度をよりよいものにしてもらうようにしている。

2021年度まで担当していた獣医生理学実習IIでは予習説明をして別日に実験をし、その実験のレポートを提出した後に考察説明の回を設けて、データの整理方法、考察が的を射ていたかどうか確認できるようにしていた。レポートは各項目班で一つなので、自分が担当していない項目について勉強しないということがないように、最後に考察記述会として、実験した項目から4～5項目選んでデータを提示して制限時間考察を記述する授業を設けており、これにより、すべての項目について学習せざるを得ない状況にしていた。そのあとに、考察記述会で提示したデータの模範考察の文をもとに穴埋めあるいは間違い探しの問題で試験をすることで、考察にはどれだけ書かなければならなかったか理解させるとともに、問題ができたかどうかで理解度を測っていた。

② 学生の理解度の把握（A）

実験項目ごとにレポートを提出させ、結果の表記法、解析が不十分なものはコメントをつけて再提出をさせている。また上記のように考察記述会とその後の試験で学生の理解度を測っている。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（B）

講義ごとに課題を出すことで、授業の振り返りとなる。また授業の感想を書いてもらうことで、自分の体験なども想起して授業と関連付けられているようである。

各実習項目では、班で一人担当者を決めるので、少なくともその項目については責任感を持って実習に取り組んでいる。また担当でなかった項目も考察記述会があるので、自習する目的となっていた。

④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（B）

教員側は質問を歓迎しているが、なかなか質問に来ない。試験に落ちてからくる人が多い。実習では実験中は各班のデータチェックをこまめにするので、教員が巡回した時に質問をしやすくしている。

⑤ 双方向授業への工夫 (B)

前回授業で出してもらった、感想等に対してのコメントを講義中に付け加えることで、双方向のなるように努力している。

実習のレポートにコメントをつけて返して再提出してもらうことで、タイムラグはあるが双方向の対応はしている。実験後の考察説明時に実験中に気が付いたことも盛り込んで説明している。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

必須問題に出題される獣医療倫理・動物福祉についての基本概念を身に付けられるようにしていた。

2021年度まで担当していた獣医生理学実習 II では基本的な生理学について、実験を通じて必ず理解させるよう評価を厳しくしていた。

総合獣医学では過去5~6年の科目の問題をまとめたものを配布して、どういうことに注意すべきか解説していた。

5. **学生授業評価** (分量の目安: 4~7行 (160字~280字))

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

技術的なこと (マイクを使うのを忘れる、字の色が見難い) は都度改善している。

評価が厳しいことへの反発に対しては変更するつもりはない。

わかりやすい、勉強になったという評価もあるので、勉強したい人の役に立っていると考えている。質問しにくいという評価が散見される。実習中は正しいデータを持って帰らせることに集中していて、考察の質問に答える時間がなく、オフィスアワーを衆知するに留まっている。

② ①の結果はどうでしたか。

技術的なことへの悪い評価は減っているようである。厳しさへの文句は変わらない。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

特になし

6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

特になし

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

上述のように、5、6年次や卒業生に役に立ったと言われることが度々ある。ほかの科目では不合格にならないのに生理学実習では不合格になったが、それにより勉強法を改善して向上したと上の学年になってから言ってくる学生も少なからずいる。

7.指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

FD等は極力参加している。

8.今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

特になし

9.添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

シラバス 学理教材 学理小テスト レポート課題 考察記述会課題 試験問題

授業評価データ

過去の授業で書いてもらった学生の授業感想

●FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施

有・無

該当を○で囲む

●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

（「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」（大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編）から引用）

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス，小テスト，宿題，レポート課題，試験問題，教材（配布資料，パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育に直接貢献する研究，FD プログラムなどへの参加記録，教育の工夫を示すもの（複数年のシラバス等），教育活動関連の補助金の獲得

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ，授業に関するコメント（授業評価の自由記述やメールのやりとり等），卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評，作成教材についての意見，同僚のサポート実績

3. 大学／学会等から

教育に関する表彰，教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類，カリキュラムやコースの設計などについての評価

（教育/学習の成果）

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化，学生の小論文・報告書，学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例，特に優秀な学生についての記録，指導学生の学会発表などの成果，学生の進路選択への影響についての事実，学生のレポートの改善の軌跡